

移民・難民研究者の抵抗？ ——人の移動の根幹を見つめ直す

中山 裕美

移民・難民・国際政治と気候変動というお題をいただき、正直なところ大きな戸惑いを覚えた。なぜなら、移民・難民研究者界隈では、気候変動の問題はメイントピックとして扱われていないからだ。ご依頼へのお返事が期日を過ぎってしまったのは、そうした戸惑いのせいだということにしておこう。

それでも執筆すると決めたのは、気候変動が移民・難民を発生させるという考えが市民権を得ている現状がご依頼の背景にあるならば、移民・難民研究に従事する研究者の一人として、なぜ我々は気候変動問題を研究のメイントピックに据えないのかという問いに答える必要があると考えたからだ。

かくして、本稿の執筆は、移民・難民研究の中では気候変動がメイントピックとして扱われていないことを確認する作業から始まった。まさしく、「ない」ことの証明、俗

に言う「悪魔の証明」である。なお、ここでの作業はあくまでも筆者の限りある蔵書に基づいた情報であることを読者の皆さんにはご承知おきいただきたい。

筆者の研究室の書棚の片面を国際政治学関連本が、もう片面を移民・難民研究関連本が陣取る。そのうち、移民・難民研究関連本は、筆者の独断と偏見によって、開発、安全保障、ジェンダー、ガバナンスといったトピック別、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジアといった地域別に分類されている。前者のトピック別分類のカテゴリに、気候変動は含まれない。このことは、移民・難民研究の分野において、気候変動が独立したトピックとしての地位を得ていないことの裏返しとも言える。

そこで、移民・難民研究の分野を体系的に扱った書籍の中で、気候変動がどのように言及されているのかを確認することにした。手始めに、移民・難民研究の入門書である

S・カースルズとM・J・ミラーによる『国際移民の時代』を手にとった。索引から「環境・災害難民」という語を引き、該当ページを開く。すると、環境難民が存在すると主張する環境保護主義論者がいるが、難民研究者は環境要因

にのみ強制移動の原因を求める見方には懐疑的であるという、少々素っ気ない書きぶりが目に留まる。同書の初版は一九九三年だが、筆者の手元にあるのは第四版（二〇〇九年発行）の訳本であり、該当箇所の記述に二〇〇二年の論文が参照されていることから、改版の過程で「環境・災害難民」の項目が追記されたと推測できる。とはいえ、本文全四〇三頁に渡る大作の中のわずか十行という分量から、扱いについては推して知るべし、である。

ほかの体系書も似たり寄ったりという状況の中で、類を見ない書籍に出会った。国内における難民研究の第一人者である小泉康一による『変貌する「難民」と崩壊する国際人道制度』である。同書は、本文全三一〇頁のうち、実に九五頁を「第六章 気候変動と強制移動」に割く。同章の副題が「気候変動は避難移動の直接の原因となるのか」であることも大いに関心を引く。小泉は、世界各地の事例を紹介しながら、気候変動が、国内統治、貧困、社会的結合力の程度、紛争といった諸要因との結び付いた結果として、人々の移動が生じていると説明する。さらに、環境難民と

いった用語の流布により、環境が変化しても移動しないことを選択した人々の存在が不可視化され、さらには環境を原因とする移動そのものを悪であると前提視していることに警鐘を鳴らす。

小泉は、移住は「適応と回復」の手段であると説く。私たちの今は、先人たちによる移動、すなわち適応と回復の経験の上に成り立つ。もちろん、そのことを災害によって移動を強いられた人々に手を差し伸べないことの言い訳に使うつもりは毛頭ない。ただ、移民・難民研究者は、気候変動と人の移動が単線的に結び付けられ、本来対処すべき統治や貧困、不平等といった人の移動の根幹にある問題が忘れ去られてしまうことへの抵抗を続けているのだと、私は思う。

なかやま・ゆみ 総合国際学研究院准教授 国際関係論
文献案内

S・カースルズ、M・J・ミラー『国際移民の時代』第四版、関根政美・関根薫監訳、名古屋大学出版会、二〇一一年
小泉康一『変貌する「難民」と崩壊する国際人道制度——二一世紀における難民・強制移動研究の分析枠組み』ナカニシヤ出版、二〇一八年

